彼女が彼と再会することになったのは、十日後のことだった。

生真面目な彼女は、なんとかして傘を返さなければと、あれから毎日、同じ時間にバス停に行ってみたのだが、彼は現れない。

どうしたらいいのかと悩みはじめた頃、思ってもみなかったところで、彼と再会した。

「号外でーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーす」

大学の正門を通り過ぎる際、手渡されたチラシの中に、彼がいた。あまりに驚いて、思わず立ち止まる。瞬間、背後から怒声が飛んできた。

「あぶないだろ！」

すみません、とあやまりながらも、彼女の目はチラシに釘付けだった。

その中で、彼はバスケ部のユニフォームを着ていた。スリーポイントシュートに入った瞬間のひとコマだろう。目は真剣に何かをみつめ、ボールはすいつくように彼の手にあった。その他にも、ドリブル中の鋭いまなざしや、味方が点を入れたときの喜ぶ姿、相手シュートをブロックしたときの闘争心むき出しの表情などが、一面を埋め尽くすように散りばめられていた。

あまりに彼しか写っていないので、いったいこれはなんなのだろうと発行者をみると、ファンクラブ、とある。

そのとき彼女は、自分が出会ったのが、同じ大学の、しかもファンクラブまで持つほどの有名人なのだと知った。

紙面の下の方には、遠慮がちな文字で、“ファンクラブ会員、募集中”と記されていた。

彼女は思った。関わり合いたくない。巻き込まれたくない。自分とは違う世界の人なのだと。

しかし、その思いとは裏腹に、彼女の目は、まだその写真の上にあった。

目が離せないのだ。ボールを追う揺るぎない瞳、ゴールを狙う真摯な眼差し。どの写真からも、痛いほどの純粋さが伝わってきて、彼女の心を捕らえた。

ただの写真でこれなのだ、もしその場にいたら、いったいどれほどの衝撃を受けるのだろう。

出会った時の姿を思い出そうとした。けれども、記憶の中では、薄いカーテンのように雨が降っていて、うまくいかなかった。

そのとき、はじめて思った。

もう一度彼に会いたいと。

それは、関わり合いたくない、という気持ちと対立した。

平凡な日常を壊したくなかった。

でも、会いたかった。

どちらも、彼女の本心だった。